

充実した環境での 医学臨床実習

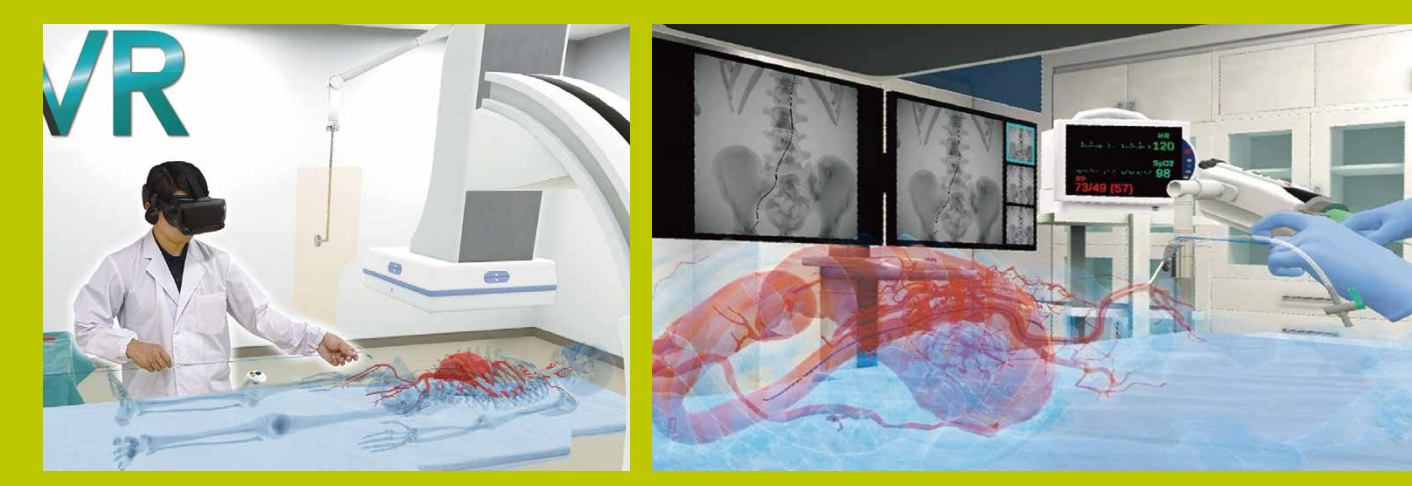
医学科では、4年次1月から5年次12月までの1年間、大学病院の全診療科の現場で学ぶ「臨床実習Ⅰ」を行います。その後、希望の診療科を選択し、さらに深く学ぶ「臨床実習Ⅱ」が始まります。「臨床実習Ⅱ」では、大学病院だけでなく県内の多くの国公立病院でも実習を行います。



VRで手技を学ぶ



VR (Virtual Reality: 仮想空間) 技術を利用したカテーテル治療 (血管造影・治療) に関するVR教育システムを開発中です。学習者がコロナ流行下でも、医療現場と同等の教育を受けられることに加え、VRシステムによる能動的な学習を通じてさらに教育効果を高めることを目的としており、現在は医学生と初期研修医に対する教育効果を検証中です。



理学療法士の視点から パラスポーツの傷害を防ぐ

学術研究とスポーツ現場の双方での活動を継続し、発展させることで、私たちはすべての人に平等な教育、健康と福祉が提供される社会の創生に寄与したいと考えています。



浦邊 幸夫 教授
(保健学科/スポーツリハビリテーション学)

知識・技能・人間性・教養を備えた
医学・医療と保健・福祉の専門職を育てる
2学科3専攻



医学科

6年間という長期にわたって学ぶ医学科の目標は、医師として社会に貢献できる人材の育成です。そのためにまず、広範な医学的知識を系統的に修得し、さまざまな症状を的確に分析、評価して問題を取り除く技能を身につけます。加えて、医学・医療の研究に取り組む柔軟な発想・創造性を養い、医療に関わる行政や法制度も学習します。さらに、国際化・情報化に対応した語学力、豊かな人間性と幅広い教養を身につけるために、多様な学問や文化に触れ、医師としてとるべき態度を涵養します。

科学的思考能力と倫理観を備えた
保健・医療の専門職へ

保健学科

看護学専攻

看護師は人の生死に向き合う職業です。人間性と教養を基盤に、専門知識・技術を学び、豊富な臨床実習も取り入れたカリキュラム編成と学習環境を用意しています。

理学療法学専攻

身体に障害をもった人や体力の低下した人に、心身両面から機能・能力の回復を図る理学療法。知識・技術の修得に加えて短期・長期の臨床実習で現場に学び、確かな実力を養います。

作業療法学専攻

作業療法学は日常生活作業を治療手段とする実践の学問。作業が心身に与える影響や作業の意義などの基礎と同時に、多様な障害に対応した援助や指導法なども幅広く学びます。

チーム医療で患者を支援

広島大学病院では、多職種からなる摂食嚥下支援チームを結成し、全病棟の嚥下障害患者のフォローと病棟支援を行っています。患者の在宅復帰・社会復帰への寄与を目的として、毎週定期的な食事時の回診とカンファレンスを行っています。さらに、チームとしての啓発活動、教育活動、研究活動も展開しています。



広島
の
地域医療を
支える
ふるさと
と
絆

ふるさと絆は広島県の地域医療を守るために設置されている、県内限定の学校推薦型の入学枠です。通常の医学教育に加えて、地域医療 (医療過疎地の医療) に触れるためのカリキュラムも多く履修します。現在、広島県内各地で約100人のふるさと絆卒業生の医師が活躍しています。

国内外の医学史を伝える 医学資料館

医学部創立30周年を記念し、1978年に設立された広島大学医学部医学資料館は、日本の国立大学医学部初の医学資料館です。戦時中に兵器庫として使われていた旧医学資料館を1999年に解体後、ほぼ同じデザインで再建。現在の建物には、被爆当時のレンガや石の一部などが再利用されています。



身軀儀 (星野木骨) 国重要文化財

女性の防災活動参加をエンパワメント

広島での地域防災の活動支援として、女性の防災活動参加エンパワメントプログラムの開発を2020年にスタート。防災士をはじめとする地域の実践者の活動とネットワーク形成を支援しています。



意欲とAIと脳刺激は三種の神器

患者の機能回復や社会復帰に欠かせないリハビリテーション。しかし患者にとっては苦行でもある、一筋縄ではいかない過程です。そこで私たちは、生体工学や神経生理学的なアプローチから、リハビリテーションの効果を加速する研究を行っています。効果を実感することで患者の意欲がアップし、積極的にリハビリテーションに取り組んだ結果、さらに効果が上がるという好循環を生み出す支援をしたいと考えています。



広島から世界に広がる 創造的な医学

世界の災害医療に貢献



令和5年防災功労者内閣総理大臣表彰受賞

私たちが開発した国際標準の診療日報「MDS」が、2017年に世界保健機構 (WHO) に承認されました。国内外の災害に際して、DMAT (災害派遣医療チーム) や国際緊急援助隊等として被災自治体や被災国保健省、WHO等と活動をともにし、被災傷病者データに基づく災害医療調整を実現。また日本の災害医療における先進技術の国際発信に貢献したことが評価されました。

医療と基礎研究の二刀流 フィジシャン・サイエンティストを目指す

診察と研究の両方を行う医師「フィジシャン・サイエンティスト」。医療と基礎研究をつなぎ、医学に新たな道を拓く存在として注目されています。広島大学では研究マインドを高めるために、国内外の施設で医学研究実習を実施。全員が研究ポスターを作成し、審査員の前で発表します。



カンボジアのウイルス肝炎を「見える化」
2030年ウイルス肝炎の世界elimination達成に向けた貢献

広島大学肝炎・肝癌対策プロジェクト研究センターでは、日本におけるC型肝炎ウイルス感染、B型肝炎ウイルス感染などの肝炎ウイルス感染状況の把握および肝炎ウイルス感染後・排除後の長期経過に関する疫学研究を実施し、政策の企画立案、基準策定、行政施策の科学的根拠となる基礎資料を提示するための研究を行っています。2016年よりカンボジア保健省等の国際共同研究のもと、カンボジア全土を対象とした肝炎ウイルス感染状況全国調査を実施しました。この功績により、今年の4月カンボジア王国政府からロイヤル・モニサラボン勳章 (コマンドール) を受賞しました。



VRゲームで小児がん患児のメンタルケア

広島大学病院は中四国唯一の小児がん拠点病院として、数多くの小児がん患児の治療を行っています。小児部門 (小児外科・小児科) では、小児がんで長期入院中の児童に対し、メンタルケアの手段としてVRでのゲームを作成するプロジェクトを開始しました。講談社と連携し、小児がんについて子どもたちの理解を深めるとともに、長期入院のストレスを和らげ、治療に向きになれるようなゲーム作りを進めています。

